アメリカ南部精神の研究
—ウィリアム・フォークナー、O・ヘンリー、スティーヴン・フォスター、ジョン・P・スーザを通して—
(共同研究)

A Study of the Southern Spirits of America
—Through W. Faulkner, O. Henry, S. Foster and John P. Sousa—
(A Joint Research)

依　藤　道　夫
Michio　YORIFUJI
齊　藤　　昇
Noboru SAITO

目　次

序　文
第1部　ウィリアム・フォークナーと南部についての研究—『墓場への侵入者』を通して
第2部　アメリカ南部の文化的所産—O・ヘンリーとスティーヴン・C・フォスター、そしてジョン・P・スーザの場合
結　び

Summary

This is a joint study on the American South through William Faulkner, O. Henry, C. S. Foster and John P. Sousa. In Part 1, racial tension is considered through W. Faulkner's detective story *Intruder in the Dust*, and in Part 2, O. Henry's literary works and Foster's nostalgic songs are discussed in relation with the Southern culture.

Faulkner seems to have wished that the severe racial problem of his South should be more humanely improved by Southern people themselves, not by the North which has failed in doing so, though that will take much time in the future. O. Henry criticizes the Utilitarianism of the North but he also rejects the old, stubborn nature of Southern people though he as a Southerner loved his South very deeply. Some of Foster's or Sousa's dear and popular songs had deep relation with the tragic situation of black slaves in the South and the nostalgic home of the Southern countryside, etc. While the South has been rapidly developing industrially and economically, it still keeps the very traditional values of its own which are both characteristic and universal, in other words, humane.

序文

本研究はアメリカ合衆国南部についての共同研究である。近年アメリカ南部の「サンベルト(Sun Belt)」としての経済的発展は目覚ましく、かつての旧弊を多く抱えた退嬰的なイメージは薄れつつある。しかし、今日もなお北部と異なる南部的な特性が相変わらず沢山残っていることも確かであり、それは文化や精神の領域ではとりわけ顕著である。本研究においては、そうした不変の南部精神の世界を、その本質を3人の代表的な南部出身者を取り上げて考察してみる。

第1部のウィリアム・フォークナー研究は依藤が、第2部のO・ヘンリーとスティーヴン・フォスター、そしてジョン・P・スーザの研究は齊藤が行っている。

第1部
ウィリアム・フォークナーと南部についての研究—『墓場への侵入者』を通して
On William Faulkner and the South—Through *Intruder in the Dust*

依　藤　道　夫
Michio YORIFUJI

1.

ノーベル文学賞受賞作家ウィリアム・フォークナー（William Faulkner, 1897—1962）はアメリカ合衆国南部ミシシッピー（Mississippi）州の出身であり、故郷を舞台とした長短多数の連作小説、いわゆる「ヨクナパトーファ・サーガ」(Yoknapatawpha Saga）を物した。彼は深南部人（Deep Southerner）であり、旧家の「南部貴族」の4人兄弟の長兄であった。それゆえ、彼は南北戦争(the Civil War）や大農園（プランテーション、Plantation)、奴隷制度（Slavery）などを含む南部史や南部社会を熟知しており、それらを主たる題材やテーマとして優れた諸作品を生み出したのである。

南部貴族の「家門」の衰退や崩壊がフォークナーの主たる関心の的だったことは紛れもない事実であるが、彼には他にも、人種、インディアン、ギャングや第1次世界大戦、第2次世界大戦、貧乏白人（Poor White）などを描いた作品もあり、更には推理小説や児童向けの物語などもある。大作家であるだけに、作品世界も幅が広いわけである。もっとも、旧家の崩壊や人種問題、貧乏白人の問題等を含むこうしたいろいろな題材やテーマは、作品によっては相互に絡み合って取り扱われていることが多いと言える。

そして『墓場への侵入者』(*Intruder in the Dust,* 1948）は、白黒の人種問題を扱った推理長篇小説である。本作においては、フォークナーの南部観、黒人観（人種観）が分かり易く現われている。

旧家出身の深南部人たるウィリアム・フォークナーは、人種問題等については、彼自身が生まれ育った深南部、その風土や人々を愛する一南部人として穏健な南部主義の立場を保持していたと考えられる。が、特に作家として名を成して以降は、私人としてのみならず公人として発言する（或いはせざるを得ない）機会も増え、自身いろいろに思案し、また苦悩することも多かったのではないかと思われる。そのことは彼が描いた諸々のエッセイからもうかがえるのではなかろうか（『ウ

ィリアム・フォークナー：エッセイ、演説、公開書簡』＜*William Faulkner:Essays, Speeches & Public Letters*, Edited by James B. Meriwether, New York, Random House, 1965＞等を参照されたい)。

ともかく、こうした人種問題は単にフォークナーや南部の問題に止どまらず、合衆国社会全体のそれなのだと言える。

『墓場への侵入者』は真の殺人犯を探す推理小説としての強い興味も読者に抱かせるが、他方でフォークナーの真摯な南部研究であり、『八月の光』(*Light in August*, 1932) や『アブサロム、アブサロム！』(*Absalom, Absalom!*, 1936) 以降の形や色合いを変えた重要な人種問題の一探究でもあったわけである。

『墓場への侵入者』はフォークナーの最大傑作の一つに数えられているわけではないが、その人種的緊張 (racial tension) を扱ったテーマからしても、彼の重要作の一つであることは間違いない。特に後期の作者にとり、スノープス 3 部作 (Snopes Trilogy) と並んで大切な作品だったと言わねばなるまい。ただ、同作『墓場への侵入者』は『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929) や『アブサロム、アブサロム！』と異なり、教訓臭が前面に押し出された主義主張のスローガン色を感じさせ、その点からもやや深遠さを欠く結果になっている。推理小説としても一流とは言い難い。

ただ、既述の通り、フォークナーの文学経歴上、重要な作品であることは確かなのである。

因みに、『墓場への侵入者』は、1949年にMGMによりオックスフォードの現地ロケを敢行することによって映画化されており (約 1 時間27分の白黒映画)、米国で広く知られた物語ともなった。A Clarence Brown Productionにより製作され、監督もC. Brownであった。

2.

町中が (いや、この件に関しては郡全体が)、ルーカス・ビーチャムが白人の男を殺したことは前の晩から知っていたのだが、保安官がルーカスを連れて留置所についたのは、その日曜日のちょうどお昼頃だった。

『墓場への侵入者』第 1 章 (鈴木建三訳。冨山房。1969)

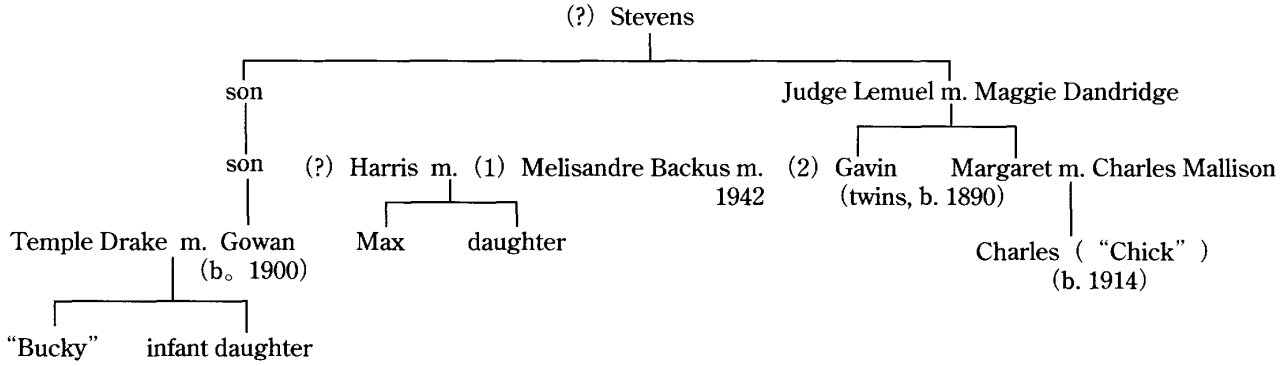
IT WAS JUST NOON that Sunday morning when the sheriff reached the jail with Lucas Beauchamp though the whole town (the whole county too for that matter) had known since the night before that Lucas had killed a white man.

Intruder in the Dust, Chapter 1, Random House (Vintage Books Edition) , 1972

このような書き出しで始まる『墓場への侵入者』は、人種的葛藤を核とする南部問題を集成する形で仕上げられた意義深い作品である。本作においてフォークナーは、『八月の光』『アブサロム、アブサロム！』や短篇「乾燥の九月」("Dry September", *Scribner's Magazine*第139号、1931年 1 月)、「デルタの秋」("Delta Autumn")、短篇集『モーゼよ、ゆけ』(*Go Down, Moses and Other Stories*, New York, Random House, 1942年 5 月) 等を通じて取り組んで来た白黒の人種問題を改めて取り上げ、しかも黒人リンチ問題を含めて、分かり易い形で考察している。大掴みに言えば、『墓場への侵入者』は殺人事件のストーリーを追いながら、その過程で、チャールズ・マリソン (Charles Mallison junior) 少年や特に彼のおじで弁護士のギャヴィン・スティーヴンズ (Gavin Stevens) を

して人種論、南部論、南北論や人生哲学を語らせている。結局、作者フォークナーは、ハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819-91）が『白鯨』（*Moby-Dick;or, The Whale*, 1851）において、復讐に燃えるエイハブ船長（Captain Ahab）が巨大な白鯨を追跡する過程で、作者自ら鯨学及び海洋の知識や人生哲学を開陳するというあの手法と同じように、彼フォークナー自身の諸主張をかなりストレートに述べ立てているわけである。

スティーヴンズ家系図
STEVENS GENEALOGY



Faulkner, A Collection of Critical Essays（Ed. by R. P. Warren, Prentice-Hall, Inc., 1966）より。

既に指摘した通り、意見や主義主張の開陳、展開を主としたためにやや冗舌でスローガン的な色合が強まり、その分、分かり易くなった半面、奥深さを欠くことにはなったと言えるが、南部人一般の人種観の実体を明解に描き出すことには成功している。そこには危険な群集心理の実態とそれを恐れる人々のヒューマンな心情とが、ともに描き出されている。

作者が相当に力を込めて取りかかったと思われる本作の構成には、幾つかの柱が見て取れる。それは次のようなものである。

①黒人ルーカス・ビーチャムの冤罪事件の推移。推理小説としての物語。
②チャールズ・マリソン（"チック"）少年のこの殺人事件、冤罪事件を通じての人生入門（イニシエーション（Initiation））の物語。
③黒人リンチに拘わる群集心理に基づく人々の行動パターン。
④主として、ギャヴィン・スティーヴンズ弁護士（ひいてはフォークナー）の人種論、南部論等（それらは南部穏健派のものであるが、やはり南部的、保守的で、反北部的なものであるとともに、南部の内部からの善意に満ちた社会改良論でもある）。

多層構造というか重層構造とも言えようか、ともかく複数の柱或いは層を抱えた全体構造が見られるのである。

このような作者の構想からしても、本作は彼の総合的な南部理解の書、彼の本格的な南部論上の提示物と見てもよい。作者は、その個人的な情念や人生哲学の深奥を描き出すというよりは、むしろ全体的、社会的な迫り方でもって矛盾を孕む、しかし彼自身愛着の深い南部社会に彼なりにメスを入れようとしたのだと言えよう。『響きと怒り』や『八月の光』『アブサロム、アブサロム！』などの深遠な諸大作において重苦しい南部のまるでギリシャ劇のように悲愴な悲劇を描き上げたあ

と、もっと明解でストレートに、社会的、地域的な観点から病んだ南部世界を今一度再考してみようとした意味深い試みだったのだと言えよう。

南部の過去、現在、そして未来にまで視野を広げた、南部人の側からの人種論、南部論、南北論、そして南部社会改良論なのである。

3.

物語は、ある年の5月のある土曜日、日曜日、月曜日の3日間の出来事を中心として、その前後を含めて展開する。この年から4年前の伏線（foreshadowing）さえ張られている。

ある土曜日の午後、黒人のルーカス・ビーチャムが「ビート4区」にあるフレイザーの店で白人ヴィンソン・ガウリー（Vinson Gowrie）を射殺したという知らせがジェファソン（Jefferson）の町に入る。チャールズ少年もそれを知る。

あの土曜の午後遅く、彼（チャールズ・マリソン）は広場を通って戻って来た（高等学校の校庭で野球の試合があったのだ）、そして彼は、ルーカスがフレイザーの店のとこで、ヴィンソン・ガウリーを殺したことを聞いたのだ、保安官に来てくれという知らせは3時頃に届き、…

『墓場への侵入者』第2章（冨山房）（　）内筆者註

Then he（Charles Mallison） came back through the Square late that Saturday afternoon （there had been a ball game on the High School field） and he heard that Lucas had killed Vinson Gowrie out at Fraser's store; word had come for the sheriff about three oclock…

Intruder in the Dust, Chapter 2

ほんの一週間前のあの土曜日、一人の年取った黒人が、彼が一人の白人を殺したのだとみんなが信じ込まざるを得ないような立場におのれを追いやったがために、すっかり台無しにされてしまったあの土曜日を…

『墓場への侵入者』第11章（冨山房）

that other Saturday only seven days ago of which they had been despoiled by an old Negro man who had got himself into the position where they had had to believe he had murdered a white man.

Intruder in the Dust, Chapter 11

ルーカスは老スキップワース巡査（old Skipworth, the constable）に逮捕される。

ホープ・ハンプトン保安官（Sheriff Hope Hampton）が翌日の日曜日にスキップワース巡査のところからルーカスをジェファソンに護送して来て、留置場に押し込めるに至る。折悪しく一族の地主キャロザーズ・エドモンズ（Carothers Edmonds）は、病気でニューオーリンズ（New Orleans）で入院しているのであった。

ルーカスの頼みにより、チャールズ少年は、同じ日曜日の夜、友人の黒人少年アレック・サンダー（Aleck Sander）と70才の老嬢ミス・ハバシャム（Miss Habersham）の3人で山上の埋葬が終ったばかりの墓を掘り、棺の中の遺体はヴィンソンではなく、ジェイク・モントゴメリー（Jake Montgomery）だったことを確認するに至る。それは5月の穏やかな宵のことであった。

… そしてもう一度、保安官がルーカスを連れて来た日曜日の昼にここで見た顔だけでもなく、医者や弁護士や牧師などを別とすれば町の人間というよりは町全体がそこに集まっているように思われたのだった。…

『墓場への侵入者』第9章（冨山房）

… and again here in the street Sunday noon when the sheriff drove up with Lucas, but the others who except for the doctors and lawyers and ministers were not just the town but the Town…

Intruder in the Dust, Chapter 9

人々が町の広場や留置場前目指して集まり出している様子も分かるのである。

「ちょっぴり早くないですかね、弁護士さん？第四区の連中は、夕飯を食って町に出て来る前に、乳を絞り、明日の朝の炊事に使う薪を伐らなきゃならんからね」

「奴等は日曜の夜は家にいることにするかもしれんよ」と伯父も機嫌よくいって通り過ぎたが、そうするとその男は、今朝床屋にいた男がいったのとまさに同じことをいったのだ…

「そうなんですよ。今日が日曜だってのは、奴等のせいじゃないですからね。あの野郎め、土曜の午後に白人を殺しやがるんなら、そのことを考えてたに決まってますよ」それから彼は、歩き続けて行く二人の背後から、声を高めて叫んだ。「今夜は女房が具合がよくないんでさ、それにわしは、あの留置所の玄関を眺めてるだけのためにあの辺をうろうろするのはごめんなんで。だが、もし奴等が助けがいるようなら声をかけるように奴等にいって下せえ」

『墓地への侵入者』第3章（冨山房）

'Little early, aint you, Lawyer? Them Beat Four folks have got to milk and then chop wood to cook breakfast tomorrow with before they can eat supper and get in to town.'

'Maybe they'll decide to stay at home on a Sunday night,' his uncle said pleasantly, passing on : whereupon the man said almost exactly what the man in the barbershop had said this morning…'

…

'Sho now. It aint their fault it's Sunday. That sonofabitch ought to thought of that before he taken to killing white men on a Saturday afternoon.' Then he called after them as they went on, raising his voice: 'My wife aint feeling good tonight, and besides I dont want to stand around up there just looking at the front of that jail. But tell um to holler if they need help.'

Intruder in the Dust, Chapter 3

文中「弁護士」「伯父」というのはギャヴィン・スティーヴンズのことである。

この前の日曜の晩は三人で充分だったわけだし、一人だって充分なことだってありうるんだ

『墓場への侵入者』第11章（冨山房）

three were enough last Sunday night even one can be enough

文中で「三人」というのは、むろんチャールズ少年、アレック・サンダー、それにミス・ハバシャムのことである。文中で「三人で充分…」というのは、3人が墓を掘りに行ったことを指すが、やや皮肉な表現を使っているわけである。16才の少年二人と70才の老嬢が深夜に山の上の墓地で死人の墓を掘り返すということが尋常である筈がない。他には誰もやる者がいそうにないから、老黒人の窮地を救うために敢えてやっていることなのである。

月曜日になって、ハンプトン保安官、シャベルを持った二人の囚人、そしてギャヴィンとチャールズ少年は、山の上の墓地へ出かけてゆく。

しかしとにかく彼は目が醒めていた。とにかくコーヒーが効いたのだ。彼はまだうとうとと眠りたいのだが、今はもう眠れないのだ、眠りたいという気持はあるのだが、しかも今彼が闘って弱めなければならないのは不眠感なのだ。もう八時すぎだった。彼がちょうどミス・ハバーシャムのトラックを舗道から道に出そうとしているとき、郡のスクール・バスが一台通って行った、そして月曜日なので、もうすぐ通りは、本と、紙袋に包んだ弁当を持ち、元気あふれた子供たちでいっぱいになることだろう、そしてスクール・バスの後ろには、田舎道の泥と埃にまみれた乗用車やトラックが数珠つなぎになって、切れ目ない列を作って並んでいたので、彼がうまくそこに割り込めないうちに、伯父と母とはもう留置所に着いてしまっていそうだった、というのは、月曜日というのは、広場のうしろの家畜売買用の厩でせり市のある日で、人の乗ってない車やトラックが、市役所の建物に沿って、飼葉桶に集まる子豚のようにぎっしりつまっており、家畜売買用のステッキを持った男たちが、立ち止まりもせずに広場を通りこし、小路を抜けて真直ぐに厩の方に行き、煙草を噛んだり、火のついてない葉巻を口にくわえたりしながら、檻から檻を見て歩いている姿を、彼は目のあたりに見ることができた、…

『墓場への侵入者』第6章（冨山房）

But at least he was awake. The coffee had accomplished that anyway. He still needed to doze only now he couldn't; the desire to sleep was there but it was wakefulness now he would have to combat and abate. It was after eight now; one of the county schoolbuses passed as he prepared to drive Miss Habersham's truck away from the curb and the street would be full of children too fresh for Monday morning with books and paper bags of recess-time lunches and behind the schoolbus was a string of cars and trucks stained with country mud and dust so constant and unbroken that his uncle and his mother would already have reached the jail before he ever managed to cut into it because Monday was stock-auction day at the sales barns behind the Square and he could see them, the empty cars and trucks rank on dense rank along the courthouse curb like shoats at a feed-trough and the men with their stock-trader walkingsticks not even stopping but gone straight across the Square and along the alley to the sales barns to chew tobacco and unlighted cigars from pen to pen…

Intruder in the Dust, Chapter 6

以上の土、日、月の3日間の時間帯の中で事件が発生し、そして解決されるという構成になっているわけである。

4.

チャールズ少年は、既にルーカス・ビーチャムと面識があった。作品の冒頭の一エピソードであるが、ルーカスが殺人事件に巻き込まれる4年前の初冬のある日のこと、当時12才だったチャールズ少年は、パラリー（Paralee）の子供で同じ年令の黒人少年アレック・サンダーと一緒に兎射ちに行ったことがあった。その折、チャールズ少年は、冷たい川に落ちてしまう。そこを通りかかったルーカスが、少年たちを自分の黒人の臭いの漂う小屋（cabin）に連れ帰り、服を乾かさせ、自身が食べる予定だった質素な食事——ルーカスの出せる最上の食事——を食べさせもする。少年は御礼の気持から持ち合わせていた50セント玉をルーカスに渡すが、彼はそれを受け取らない。少年はお金を床に落として、拾わせようとするが、ルーカスはそれをアレックに拾わせ、少年に返させる。気まずい雰囲気であるが、このあたりにも白人階級の意識を潜在的に有するチャールズ少年と黒人ながら誇り高いルーカスのある種の（「対立」というよりは）「葛藤」が見て取れる。黒人ながら彼ルーカスにとって、チャールズ少年たちはかつての大農園主キャロザーズ・マッキャスリン（Carothers McCaslin）一族の血を汲むところの彼の客人としてその小屋に招かれたのであり、にもかかわらず、少年は何も分かっていなかったのであり、そこに少年の「敗北」と言うか「恥辱」と言うべきか、ともかくこの一事が大変苦い記憶物として澱（おり）のように彼の心の基底部に居座ってしまうのである。

チャールズ少年にとりこの小さくてしかも大きな事件が作品の冒頭で伏線として敷かれた上で、ルーカスの冤罪の物語が展開してゆくことになるのである。

因みに、ルーカスの住まいはジェファソンから17マイル離れたところにある独身の地主のキャロザーズ・エドモンズ（Carothers Edmonds）の地所の一隅にある。エドモンズの父が黒人の従弟とその子孫にその小屋を含む10エーカーの土地を与え、その小さな長方形の土地は2000エーカーの大農園（プランテーション）の中にちょうど「封筒の真ん中に貼った切手のように」（a postage stamp in the center of an envelope）存在していたのである。実のところ、ルーカスの自負心やプライドの強さ——白人たちにはそれが傲慢で生意気と受け止められていた——は、このような旧家の流れ、その一員なのだという彼の自意識にも由来していた。ルーカスは、エドモンズの曾祖父キャロザーズ・マッキャスリンとその息子にも使われていた奴隷たちのうちの一人の息子なのであった。

ルーカスは、そうした質素な小屋に小柄な妻モリー（Molly）——ミス・ハバシャムはモリーと仲が良かった——と一緒に暮らしていた。モリーは、チャールズ少年がそこで食事をした時はまだ健在だったが、ルーカスが殺人事件に巻き込まれた頃にはもう亡くなっていた。ルーカスは、普段から白人にへりくだらず、誇り高く我が道をゆくタイプで、服装にも常にこだわりを見せ、金の爪楊枝をくわえ、海狸の帽子をかむっていた。上手の何一つ言えない正直者で、頑固者であった。従って、町の白人たちからは傲慢な黒人だとして嫌われがちだったのである。作中では、次のようにも描かれている。

…帽子もまた、使い古してはあるが、お祖父さんもそれ一つに三十ドルか四十ドルも払って使っていたような、手縫いの海狸の帽子だった。それは色だけは黒人だが鼻柱は高く、いくぶん鉤鼻になっている顔に、かぶっているというよりはちょこんと載っているといった形だったが、その顔に現われているもの、顔の奥から滲みでているものは、黒でもなければ白でもなく、傲慢さも少しもなく、侮蔑的ところもなく、ただ厳しく不屈で、しかも落着きはらっているのであった。

『墓場への侵入者』第1章（冨山房）

…the hat was a worn handmade beaver such as his grandfather had paid thirty and forty dollars apiece for, not set but raked slightly above the face pigmented like a Negro's but with a nose high in the bridge and even hooked a little and what looked out through it or from behind it not black nor white either, not arrogant at all and not even scornful: just intolerant inflexible and composed.

Intruder in the Dust, Chapter 1

チャールズ・マリソン少年は父母とおじ（母の兄）のギャヴィン・スティーヴンズ弁護士と一緒に一つ家に暮らしている。ギャヴィンの弁護士事務所は町の中央広場に面した建物の中に、広場を見下ろす形であり、少年は普段からそこに自由に出入りさせてもらっている。本作はチャールズ少年が主人公であり、彼を中心とした物語である。そしておじのギャヴィンは少年の相棒役ということになるが、実際には、少年はギャヴィンおじの助手的存在とも言えるわけである。ルーカスは作中の重要なキーマンたる立場を占めるが、そのルーカスの冤罪の物語を少年やギャヴィン弁護士が解きほぐしてゆく役割を担うわけである。ともかく、本作は、チャールズ少年にとって、人生入門、イニシエーション（Initiation）の物語なのである。

因みに、クリアンス・ブルックス（Cleanth Brooks, 1906—94）も、本作のことを「チック・マリソンが成長してゆく姿を描いた小説（a novel about Chick Mallison's development toward maturity）だと言っている（*William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*, Yale University Press, 1978）。

チャールズ少年はやさしい、少年らしい純粋さを持った正義漢であり、南部的心情の持主だが、行動力と勇気とを備えている。50才になる独身のギャヴィン・スティーヴンズはいかにも法曹界の人間らしく、論理的でクールであるが、同情心もあり、やはり正義漢で、南部の穏健派としての保守的立場を有している。

なお、ギャヴィン・スティーヴンズは、従来から、作者フォークナーの初期の文学上の指導者フィル・ストーン（Phil Stone, 1893—1967）をモデルとして創造された人物だと広くみなされている。彼フィル・ストーンは地元のミシシッピー大学（The University of Mississippi）のみならず、北部のイェール大学（Yale University）にも学んだ、オックスフォードの有能な弁護士であり、文学に対する造詣も深かった。理想的な南部紳士であった。フォークナーは、若かりし頃、4才年上のこのストーンから多大の恩恵を受けており、沢山の文学上の教えも受けている。従って、『墓場への侵入者』のギャヴィンの思想にストーンのそれも多分に反映していると考えることは十二分に可能である。ただ、ストーン夫人であるエミリー・ホワイトハースト・ストーン（Emily Whitehurst Stone, 1909—92）女史は、生前筆者のインタビューの中で、フォークナーが夫ストーンをモデルとして、ひたすらに冗舌なギャヴィンを創り出したことをよしとはされていなかった。夫ストーンとギャヴィンとの間に相当の乖離があることを指摘されたわけである（この点については拙著『フォークナーの世界——そのルーツ』（成美堂、1996）を参照されたし）。

5.

ギャヴィン・スティーヴンズは、ルーカス・ビーチャムが冤罪を蒙っているということを必ずしも最初から積極的に信じたわけではない。まず甥のチャールズ少年が行動を起こす。作中に明確に記してあるわけではないが、少年は既にルーカスの人となりを知っていたわけであり、そのルーカスが殺人というような恐ろしい罪とは結びつきにくいと直観的に感じていたのではなかろうか——。

留置場に連行されるルーカスから「君のおじさんに私が会いたがっていると伝えてくれ」と頼まれた少年は、おじギャヴィンとともにルーカスと面会する。留置場の一階には射撃の名手ウィル・レギット（Will Legate）が万一の事態に備えて待機している。集まって来た群集が暴発して、ルーカスにリンチを加えることを恐れて、保安官がそうした処置を取ったのである。因みに、このウィル・レギットは、短篇「デルタの秋」（"Delta Autumn"）などにも狩猟団の一員として登場している。

最初の面会の直後に単独でまた戻って来たチャールズ少年に対して、ルーカスは埋葬されたヴィンソン・ガウリーの死体を掘り出して射たれた傷口を調べさせてみてくれと頼む。ルーカスの古い41口径のコルト拳銃で撃った傷口ではないことが分かる筈だというわけである。

こうして少年たち３人が、少年は馬で、アレックとミス・ハバシャムは無蓋のトラックで夜中に山上の教会にゆき、墓地を掘り返すことになる。クライマックスの一場面である。むろん、３人は死体を持ち帰る積りである。このあたりは、マーク・トウェーン（Mark Twain, 1835—1910）の傑作『トム・ソーヤーの冒険』（*The Adventures of Tom Sawyer*, 1876）の中のトム少年たちの幽霊屋敷探検や、インジャン・ジョー（Injun Joe）の潜む洞窟の中の恐怖行などの場面も思い起こさせてくれる。

さて、夜の11時近くになってようやく山上に到着したチャールズ少年たち３人が掘ったヴィンソンの棺の中には、彼ヴィンソンの遺体でなく、ジェイク・モントゴメリー（Jake Montgomery）のそれが入っていた。モントゴメリーはクロスマン郡の方からやって来た材木買い付け人で、ろくに元手もない男であった。結局、３人はその死体を埋め戻す。実は、３人は、山上へ登ってゆく途中で既に、上から降りてくる人間と荷を積んだラバを闇の中で木蔭に隠れて目撃していた。暗闇なので顔も分からなかったけれども、これが殺人犯人のクロフォード・ガウリー（Crawford Gowrie）で、真相が判明するのを恐れて、ヴィンソンの死体を掘り出し、それを運んでいたのだということが、後になって明らかになる。

「ビート４」（Beat 4）というあまり柄のよくない地域に住むガウリー一族の描写は、非常に鮮明というわけではない。胡散臭い雰囲気の漂うこの一族には父親のナブ・ガウリー（Nub Gowrie）や息子たちがいるが、末子ヴィンソンが兄の一人のクロフォードにドイツ製のルーゲル銃で撃ち殺されていた。そしてルーカスが兄弟殺しの罪を被せられていたわけである。クロフォードは、少年たち3人がヴィンソンの墓にやはり彼クロフォードが殺して埋めたジェイク・モントゴメリーの死体を発見したのを見て、急ぎジェイクの死体を掘り出し、結局二体とも一晩の内に慌てて川辺の別々の場所に埋めていたわけである。二体目を運ぶ時はもう夜が明け始めていた。

月曜日になって、チャールズ少年らの報告を受けたハンプトン保安官やギャヴィン・スティーヴンズは、少年ともども山上の教会の墓地へと車を走らせる。手伝いのための黒人囚人二人も伴っていた。墓地に行くと、老ナブ・ガウリーが息子たちのうちの双生児ヴァーダマン（Vardaman）とビルボー（Bilbo）、それに犬を連れて現われる。一緒に墓を掘るが、当然中は空っぽであった。

彼らは川辺へと下っていって、２遺体を発見し、掘り出すに至る。ヴィンソンの死体は橋の所のやわらかい流砂の中に埋められていた。結局、クロフォードは、弟ヴィンソンとアンクル・サドレー・ワーキット（Uncle Sudley Workitt）の材木を盗んでいたところをヴィンソンに知られて彼を殺し、更にジェイク・モントゴメリーがヴィンソンの死体を墓から掘り出すのを待ち構えていて、ジェイクをその頭を打ち割って殺していた（ジェイクはクロフォードの殺人を知り、彼をゆすっていた）。

ルーカスはこの材木盗みに気がついていて、注意して見張っていて難に会う。ヴィンソン殺しの殺人現場に居合わせたルーカスは、自分の41口径のコルト拳銃の柄をうしろに突き出すようにしてヴィンソンの死体を見下ろしていたところを犯人に仕立て上げられて逮捕されたのである。川辺から引き出されたヴィンソンの遺体の傷口は、41口径のコルト拳銃によるものではなかった。クロフォードの悪事を明らかにしようとしたルーカスは、逆に殺人犯にされてしまったのである。

ルーカス・ビーチャムは釈放され、真犯人のクロフォード・ガウリーが逮捕される。しかし、結局、クロフォードは、牢内で自身のドイツ製ルーゲル拳銃で自殺を遂げることになる。

結局、柄の悪いガウリー家の身内の争いに、普段、白人たちから生意気な黒人め、と思われていたルーカスが、自身の不注意もあって巻き込まれ、処刑かリンチの寸前までいってしまったわけである。その危うい彼を一部の良識ある白人たちが救ったということなのである。

南部の抱えるこうした重いテーマを扱うに際し、ここではフォークナーは推理小説の形を選んだのであるが、その手法が作品の全体的効果を高めるのに有利に働いたかというと、そうでもない。『墓場への侵入者』は、推理小説としてはややルーズで、緊迫感に欠けるところがある。早々に種明かしがされてしまった探偵小説といった印象を残している。

とりわけ興味を持たされるのは、群集心理を扱っている部分である。黒人の白人殺しの噂が広まると、ジェファソンの郊外からも続々と車が町の中心部、広場と留置場前に押し寄せてくる。そして街路は車列で身動きが取れなくなってしまうのである。他方、黒人たちは息をひそめて家の中に閉じ籠もっている。そして大嵐が頭上を吹き過ぎてゆくのをひたすら待つのである。

白人側の人種偏見に基づくこうした群集の心理や行動はかつての南部社会にはしばしば見受けられたものなのであろうが、フォークナー自身も少年時代から地元で時折目にした光景だった筈である。ジョゼフ・ブロットナー（Joseph Blotner）は、作品のベースになった実際の出来事に言及している（*Faulkner, A Biography*, Vol. 2）。白人を殺した黒人に対するみせしめとしての残酷な集団リンチの構図——まるで絵に描いたようなその構図がここに再現されているのである。恐いもの見たさの欲望や快感、多勢が同一方向に向かって一斉に動いてゆくその盲目的な行動や、そして事件の真相が判明するやあっさりと散ってゆく単純でワン・パターンな流れ——、フォークナーは人種差別意識が当たり前のこととして定着している深南部社会の大衆心理の危うさ、恐ろしさを鋭く問い詰めているのである。彼自身もそのれっきとした一員である深南部社会の孕む根深い病巣に複雑な思いを込めながら、メスを入れているのである。

6.

既に触れたように、フォークナーは主としてギャヴィン・スティーヴンズの口を通して自らの南部観、人種観、北部観などを詳細に述べている。そしてそれは、基本的には、南部的な考え方に則ったものであった。既述のように穏健な南部保守主義、人間愛を含む南部的な愛国主義とでも言うべきものである。

チャールズ少年の想いの中でも、北部は次のようなものなのである。

> たんなる北部ではなく、あのはるか彼方の土地、その境を区切るあたり、地理上の場所ではなく、一つの情緒的な理念であるあの「北部」へと拡がっているのであり、その「北部」とは、彼が母親の乳を通じて、少しも恐れることもなく、実際のところ憎む必要もないのだが、ただ——ときには少しばかり面倒臭そうに、ときには嘲笑さえ浮かべて——挑戦すべきだと教えこまれて

きた、常に、そしてどんなときでも、抜け目なく気をつけるべき一つの＜状態＞を指しているのだ。

『墓場への侵入者』第７章（冨山房）

… not north but North, outland and circumscribing and not even a geographical place but an emotional idea, a condition of which he had fed from his mother's milk to be ever and constant on the alert not at all to fear and not actually anymore to hate but just—a little wearily sometimes and sometimes even with tongue in cheek—to defy…

Intruder in the Dust, Chapter 7

ギャヴィン・スティーヴンズの人種論、黒人論は、作中諸処にちりばめられているが、そのポイントは、第７章の次の一節に含まれていると言ってよかろう。ここは大切なところなので長目の引用になることを了承願いたい。

われわれが北部に抵抗しなければならない理由はこれなんだ。われわれを守るためでもないし、われわれの双方が一つになって、一つの国として留まるためでもないんだ、そんなことは、もうわれわれが守っていくものから不可避的に出てくる副産物なんだ。われわれが守りたいものは、三世代前に、われわれがまさにそのためにわれわれの裏庭で血みどろに戦って破れ、それゆえに無傷ですんだもの、サンボーは自由な国に住んでいる一人の人間なのであり、それゆえ自由でなければならない、という公理なのだ。それこそわれわれがほんとうに守ろうとしていることなのだ。彼をわれわれの手で自由にする特権こそがね。他の誰もそれをやれないのだから、われわれがそれをしなければならない、というのは、もう一世紀も前に北部がそれをやろうとし、七十五年のあいだずっと、彼等が失敗であったことを認めているのだ。だからそれをするのはわれわれの仕事なのだ。まもなくこういったことは起こらなくなるだろう。いやもう起こしてはならないのだ。もうけっして起きてはならなかったのだ。それなのに、この前の土曜日に起こってしまったのだし、たぶんまた起こるかもしれない、たぶんもう一度、いやもう二度でも。しかし、それ以上起こしてはならない。もちろんこの汚辱は、それでもなお残るだろう、しかし、人間の不滅性の全年代記というものは、人間が耐え忍んだ苦悩の中に、己れの罪の償いを踏み石としての星へと向かう苦闘の中にあるのだ。いつの日かルーカス・ビーチャムは、白人と同じく、リンチの綱やガソリンを怖れることなしに、白人を後ろからでも射つことができるようになる。まもなく白人と同じように、いつでもどこでも投票するようになるだろうし、その息子を白人の子供のゆくどんな学校にでも入れられるようになるだろうし、白人の旅行するところならどこでも旅行できるようになるだろう。しかしそれは、この次の火曜日というわけにはいかない。しかし北部の連中は、それをすぐ次の月曜日に、印刷した箇条に賛否を投ずるということにより、単純に決めて強制できると思い込んでいる。奴等は、もう四分の一世紀も前に、ルーカス・ビーチャムの自由はわれわれの憲法のちゃんとした条文になっており、ルーカス・ビーチャムの主人公はそれをのみこむために、打ちのめされ跪かされただけでなく、十年というもの泥の中に押しつけられたということを忘れてしまったのだ、しかもわずか三世代で、さらにまたルーカス・ビーチャムを自由にするための法律を通す必要に迫られているというわけなのだ。

「そしてルーカス・ビーチャム、つまりサンボーもまた、われわれと同質の人間なのだ、ただ、

その一部のものが、白人たちの最善のものではなく、二流のものに逃げこもうとしているのだ——あの安っぽい、見掛け倒しの、不純な音楽、安くてきらきらする、ほんとうの根のない見掛け倒しの金とか、深淵の上に建てられたトランプのカードで作った家のような、なんの基礎ももたぬ人気というきらびやかな殿堂、それから、かつてはわれわれの小さな国民的産業だった、そして今では国民的素人娯楽となっている、政治的活動という騒々しい泥沼の中——わざわざ騒ぎをかきたて、こういった下らないことへのわが国民の熱狂のお蔭で金持になっている連中が作りだした、にせものの騒ぎの中にはいりこもうとしているのだ。そいつらは、最上のものでも、自分たちの口の中にはいる前に品が落とされ、穢されていなければ受けつけられぬ連中。世界中で、公然と二流である、つまり低俗であることを威張って回る唯一の連中なのだ。

『墓場への侵入者』第７章

That's why we must resist the North: not just to preserve ourselves nor even the two of us as one to remain one nation because that will be the inescapable byproduct of what we will preserve: which is the very thing that three generations ago we lost a bloody war in our own back yards so that it remain intact: the postulate that Sambo is a human being living in a free country and hence must be free. That's what we are really defending: the privilege of setting him free ourselves: which we will have to do for the reason that nobody else can since going on a century ago now the North tried it and have been admitting for seventy-five years now that they failed. So it will have to be us. Soon now this sort of thing wont even threaten anymore. It shouldn't now. It should never have. Yet it did last Saturday and it probably will again, perhaps once more, perhaps twice more. But then no more, it will be finished; the shame will still be there of course but then the whole chronicle of man's immortality is in the suffering he has endured, his struggle toward the stars in the stepping-stones of his expiations. Someday Lucas Beauchamp can shoot a white man in the back with the same impunity to lynch-rope or gasoline as a white man; in time he will vote anywhen and anywhere a white man can and send his children to the same school anywhere the white man's children go and travel anywhere the white man travels as the white man does it. But it wont be next Tuesday. Yet people in the North believe it can be compelled even into next Monday by the simple ratification by votes of a printed paragraph: who have forgotten that although a long quarter-century ago Lucas Beauchamp's freedom was made an article in our constitution and Lucas Beauchamp's master was not merely beaten to his knees but trampled for ten years on his face in the dust to make him swallow it, yet only three short generations later they are faced once more with the necessity of passing legislation to set Lucas Beauchamp free.

And as for Lucas Beauchamp, Sambo, he's a homogeneous man too, except that part of him which is trying to escape not even into the best of the white race but into the second best—the cheap shoddy dishonest music, the cheap flash baseless overvalued money, the glittering edifice of publicity foundationed on nothing like a card-house over an abyss and all the noisy muddle of political activity which used to be our minor national industry and is now our national amateur pastime—all the spurious uproar produced by men deliberately fostering and then getting rich on our national passion for the mediocre: who will even accept the best provided it is debased and befouled before being fed to us: who are the only people on earth who brag publicly of being second-

rate, i.e., lowbrows.

Intruder in the Dust, Chapter 7

人道主義的な人間愛、家族愛に基づくゆるやかな改革を待つ——これがギャヴィンの、そしてフォークナーの人種問題に関する主張のここでのポイントであろう。『墓場への侵入者』は殺人事件の解決を目指す推理小説の体裁を取りながら、社会改良の理想を込めた問題小説（problem novel）でもあるのである。

事件から一週間後の土曜日、ルーカスが人々や車で賑わう広場に面したギャヴィンの法律事務所にやって来る。弁護代を支払いに来たのである。ルーカス・ビーチャムは、ギャヴィンの請求したペン先代金のみの 2 ドルを一セント玉を積み上げて律儀に差し出す。ルーカスは、あの生死のかかった大騒動の直後であるにもかかわらず、以前同様にあくまで自分流を頑固に冷静に貫き通すのである。

ともかく、フォークナーのこうした突き離したような、しかも愛情の籠もったルーカス描写の中に、フォークナー流の南部主義的ではあるものの人間主義的な人種観が如実に見て取れるのである。

W・フォークナーとアメリカ南部研究においては、筆者の長年の友人でテネシー州ナッシュヴィル在住のフリーランス・ライター（freelance writer）でNashville House of Booksのオーナーたるウィリアム・ブーザー（William Boozer）氏とその妻キャロル（Carol）夫人に多くを負っている。改めて厚く感謝申し上げる。なお、ブーザー氏はスティーヴン・C・フォスターの遠縁に当たる。

更に、イェール大学英文科（Department of English, Yale University）のヴェラ・クチンスキー教授（Prof. Vera Kutzinski）、ワイ・チー・ディモック教授（Prof. Wai Chee Dimock）、ウェス・デイヴィス教授（Prof. Wes Davis）にも厚く御礼申し上げる。

同英文科のフレッド・C・ロビンソン名誉教授とヘレン夫人（Prof. Fred C. Robinson & Mrs. Helen Robinson）にも深甚なる謝意を表したい。

イェール大学の故クリアンス・ブルックス教授（Prof. Cleanth Brooks）、そしてノースカロライナ州シャーロット（Charlotte, North Carolina）の故エミリー・ホワイトハースト・ストーン夫人（Mrs. Emily Whitehurst Stone）の思い出も今なお新鮮である。

参考文献

William Faulkner, *Intruder in the Dust*, Random House（Vintage Books Edition）, N.Y., 1972

ウィリアム・フォークナー著。鈴木建三訳『墓地への侵入者』冨山房。東京。1969

Joseph Blotner, *Faulkner A Biography*, Volume 1, Volume 2, Chutto & Windus, London, 1974

Cleanth Brooks, *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*, Yale University Press, New Haven and London, 1978

James W. Webb and A. Wigfall Green（ed.）, *William Faulkner of Oxford*, Louisiana State University Press, 1965

第２部
アメリカ南部の文化的所産
—O・ヘンリーとスティーヴン・C・フォスター、そしてジョン・P・スーザの場合—
Cultural Products of the South
—With Special Reference to O. Henry, S. Foster and John P. Souna—

齊　藤　　昇
Noboru SAITO

１．南部時代のO・ヘンリー

O・ヘンリーの48年間の生涯は、四つの期間に大別することができる。

すなわち、出生から20歳まで故郷で過ごした青少年期で、叔母の教える私塾で学んだ後、叔父のドラッグ・ストアで薬剤師の見習いとして働いた第一期、知人についてテキサスに移りカウボーイの仕事を覚えたり土地管理事務所や銀行で働きながら意中の女性と結婚して短編を書き始めた33歳までの第二期、比較的幸せだった第二期より一転して銀行から横領の容疑で告訴され逃走後に逮捕されて３年３ヶ月服役した上、その間に妻を亡くした苦悩の５年の歳月に当たる第三期、さらに1901年７月に出所すると、翌年の春ニューヨークに移って本格的な作家活動を行い、多くの名作を残した最後の９年間である第四期に分けられる。

O・ヘンリーの作品は、たとえ数ページの小品の場合にも明確な発端とヤマ場と結びを持つ構成の周到さで知られている。しかし、上述のようにこの作家の来し方を通観する時、彼自身の生涯もまた際立つ起承転結の四つの時期に区分されているとも言える。

そこで、第２部の本稿では彼の文学的な醸成期でもあった南部時代を中心に、後に多彩な作品を誕生させることになる背景を探求したい。さらに、O・ヘンリーとの同質性を求めてスティーブンC. フォスターとジョン・P. スーザの軌跡を辿ることにする。

O・ヘンリーは、1862年９月11日にノース・カロライナ州ギルフォード郡グリーンズバロ（Greensboro, Guilford County, North Carolina）で生まれた。父アルジャーノン・シドニー・ポーター（Algernon Sidney Porter）、母メアリー・スウェイム・ポーター（Mary Swaim Porter）の次男であった。洗礼名はウィリアム・シドニー・ポーター（William Sidney Porter）だったが、30歳を過ぎたころ、ミドル・ネイムの綴りのSidneyをSydneyに変えている。これがO・ヘンリーの本名である。

彼の出生は南北戦争酣の時期で、激戦で知られる第二次ブル・ラン川（Bull Run）の戦いの二週間後、またアンティータム（Antietam）の血戦の一週間前であった。従って彼の少年期は、戦いに敗れて疲弊した南部が戦後の再編成という苛酷な現実に屈辱的な対応を迫られた時でもあった。その暗い影を負った社会的背景が、O・ヘンリーの性格や作品に深い影響を及ぼしたことは当然であった。後に彼が「都市通信」（"A Municipal Report"）や「ビリーの解放」（"The Emancipation of Billy"）などの作品で、南北戦争以前と以後の南部の鮮明な対比を描いたのはその例証と言えるであろう。

さらに、少年期の家庭環境や教育の状況がO・ヘンリーの文学に対する興味の啓発や、人生観の形成に深い関わりを持ったことも明らかである。そのため本稿においては、祖父母の代まで遡って、

これらの状況を検討したい。

O・ヘンリーの父方の祖父シドニー・ポーター（Sidney Porter）は、1823年に北部のコネティカット州ブリストルからノース・カロライナ州に移住したジェローム時計会社（Jerome Clock Company）のエージェントであった。彼は陽気でお人好しの大柄な男だったが、酒に溺れる悪癖があった。やがて彼は、クエーカー教徒の娘メアリー・ワースと結婚した。それがO・ヘンリーの祖母となるルース・ワース・ポーター（Ruth Worth Porter）である。

シドニー・ポーターは時計会社の仕事にはあまり熱心でなかったので、間もなく職を失って馬車や機械の修理店をグリーンズバロで開業した。しかし深酒は相変わらずで、1830年代後半には、しばしば泥酔のため法廷に立たされたりしたこともあった。妻ルース・ワースが43歳のとき、彼は七人の子どもと借財を残して他界している。しかし気丈な彼女は、自宅を下宿屋にして生計を立て子どもたちを育てた。O・ヘンリーの父アルジャーノンはその中の一人であるが、O・ヘンリー自身も後述する通り、この祖母から少なからぬ影響を受けたのである。

一方、母方の祖父ウィリアム・スウェイム（William Swaim）は、オランダからニューヨークに渡来した移民の子孫で、ノース・カロライナに移住した後、1827年にグリーンズバロの地方紙「愛国者」の主幹となっている。彼は奴隷制度廃止論者だったので制度の存続を求める南部の真っ只中に住みながら、堂々と自説を主張し続けた。1830年には「奴隷制度の罪悪についてノース・カロライナの人々に訴える」("An Address to the People of North Carolina on the Evils of Slavery") と題したパンフレットを発行し、さらに1832年 5 月30日付「愛国者」の論説では、奴隷の使用を続ける農場主を糾弾して「腐敗した安っぽくきらびやかな王座を得るために、大義を捨てて妥協するより、パンを乞いながら自由に生きる方がましであろう」と述べている。また、母方の祖母アビア・シャーリー（Abia Shirley）は、ヴァージニア州プリンセス・アン郡（Princess Anne County, Virginia）の裕福な農場主ダニエル・シャーリー（Daniel Shirley）の娘で、未婚の頃メアリー・ヴァージニア・ジェーン・スウェイム（Mary Virginia Jane Swaim）と呼ばれていた。O・ヘンリーの母は、前述した「愛国者」の主幹ウィリアムとアビアの間に生まれた長女であった。

さて、O・ヘンリーの父アルジャーノンは、医師としてグリーンズバロで開業していたが医科大学を出て正規の免許を持つ医者ではなかった。この頃のノース・カロライナでは、医師から医薬品について教えを受け、書物や講義で化学と生物学の知識を身につけた上で調剤の実務を薬剤師から学ぶと、医者としての業務を行うことが認可されていた。アルジャーノンは、町の著名な医者で、エッジワース女学校（Edgeworth Female Seminary）の校長も兼ねているデイヴィッド・P・ウィア（Dr. David P. Wier）の薬局で働くことによって医師の資格を取得したのであった。

このように履歴は変則的だったが、折からの南北戦争で設営された南部連邦の野戦病院で瑕疵なく勤務し、また開業した後も多くの患者から高い信望を得た事実から、彼が有能な医師であったことは容易に推察されるであろう。その頃のグリーンズバロでは、「彼が部屋に入って来れば、すぐ病気は良くなる」と言われるほどの名医であったのだ。また若い医者だった時期には、「降っても照っても、具合が良くても悪くても、彼はいつも変わらず誠実、高潔、寛大で、土地の最も貧しい家族でさえ快く往診した」との評判は定着していた。アルジャーノンは1858年まで、母ルース・ワースが下宿屋を営む家に住んでいたが、その年メアリー・スウェイムと結婚したので別に居を構えた。夫婦は、三人の子どもに恵まれた。1860年に長男シャーリー（Shirley）、1862年には次男ウィリアム（O・ヘンリー）が生まれたが、三男デイヴィッドは1865年の生後すぐに死亡している。シェリー（Shelly）と呼ばれた兄シャーリーは腕力の強い暴れ者で弟のO・ヘンリーはいつも苛めら

れていたという。シャーリーは一生の大部分をカロライナ木材造営地の建築業務に従事して送ったが、結局少年期にも成人した後にも、この兄弟の間には共通するものが何一つなく、愛情と呼び得る絆は存在しなかったようである。

兄弟の母メアリーは、グリーンズバロ女子大学（Greensboro Female College）でフランス語と美術を学んだ。文才と画才ともに秀でていたらしく、卒業に際しては「才能ある者に落とされた不運の影」（"The Influence of Misfortune on the Gifted"）と題するエッセイを残している。彼女はユーモアがあり言語について鋭い感覚の持ち主だったと言われるから、器用に絵を描き文筆で身を立てたO・ヘンリーの素質は、すべてこの母に負うものと思われる。しかし、不幸にも彼女は肺結核のため1865年に他界している。O・ヘンリーはわずか 3 歳、母は30歳で、 5 年に亘る南北戦争が漸く終結した年であった。

妻メアリーの死後、アルジャーノンは子どもたちを連れて母の下宿屋である元の住居に戻った。彼は診療の請求書を出さなかったので母が代わって取り立てることもあったが、十分な収入とはならなかった。さらに、アルジャーノンの発明熱が嵩じて医療に身を入れなくなったために家計はますます逼迫した。彼が凝ったのは、水車の原理を応用した無限運動の装置をはじめ、飛行機や蒸気で動く車など様々で、あと僅かな調整で仕上がると言いながら遂にどれ一つ完成しないで終わっている。

やがてアルジャーノンは医療の仕事をほとんど顧みなくなったので、彼に代わってジェイムズ・ホール（James K. Hall）医師がグリーンズバロに移住して、住民の医療に当たることとなった。ホール医師は、長男のリー・ホール（Lee Hall）が勇名の高い森林警備隊大尉で、後にO・ヘンリーがテキサスを訪れてその地に定住する契機を作った人物でもある。一方、大酒飲みだった父親シドニー・ポーターの血統を継ぐかのように、アルジャーノンもアルコールにおぼれ、晩年は酒びたりの日々を送っていた。

この間、苦しい家計を切り盛りしてO・ヘンリーら二人の子どもを養育したのは彼らの祖母ルース・ワースと父アルジャーノンの妹である叔母エヴァリーナ・マリア・ポーター（Evalina Maria Porter）であった。特に子どもたちの母の死後、彼らの面倒を見るために同居した叔母は、やがて一家の財政を助けるために住居の敷地内に私塾を開くなり近隣の子どもたちを集めて教え始めた。O・ヘンリーも15歳になるまで、この私塾の生徒として叔母からいろいろな教えを受けたのである。

人々からミス・リーナ（Miss Lina）と呼ばれた未婚の叔母エヴァリーナが、女子に高等教育を授けるエッジワース女学校で学んだ文学好きの女性であったことは、O・ヘンリーにとって幸運であったといえる。

O・ヘンリーの少年期からの友人で、後に彼の伝記を書いたチャールズ・アルフォンソ・スミス（Charles Alphonso Smith）は、当時のミス・リーナを回想して次のように述べている。

> 彼女は決然とした態度の知性のある婦人で、父親の楽天的な性格ではなく母親の指導力を受け継ぎ、彼女のもとで学ぶ総べての少年と少女を幸せにしようという強い責任感を持っていた。（中略）もちろん彼女はしつけには厳しく、鞭を惜しむことはなかった。しかし、ミス・リーナの性格に苛酷さはなく、彼女の正義には、慈悲とまではいかないまでも、少なくとも厳正な公平さと心からの笑いという味つけがあった。（Richard O'Connor, *O.Henry : The Legendary Life of William S. Porter*; 10）

確かにミス・リーナは厳しい反面、生徒たちを飽きさせずに楽しく指導する術を心得たすぐれた教師だった。スミスと同様に、ウィルの少年時代の仲間だったトム・テイト（Tom Tate）は、次のように述懐している。

金曜日の夜、生徒たちは先生の家に集まって楽しく過ごした。部屋の暖炉で薪を燃やして、栗やポップコーンを焼いたり、ウズラやウサギの肉をバーベキューで食べたりした。こんな時にはいつも、本を読んだり物語を聞いたりした。また、誰かが最初にお話を始めて、他の生徒たちが順番に話をつないで終わりまで進む物語ゲームをすることもあった。夏はピクニックや魚釣りに、秋は栗や胡桃拾いに、さらに春は野生の花つみに出かけたが、これらはすべて先生の個人的な指導によるものであった。（*Waifs and Strays*; 130—131より）

このような性格のミス・リーナは、幼くて母を失った甥たちに接すると直ぐ、彼らに読み書きの手ほどきをしようと考えた。年上のシェリーは5歳、ウィル（Will）と呼ばれていた年下のO・ヘンリーは3歳だったが、シェリーが全く関心を持たないのに対してウィルは早々とアルファベットに興味を示した。彼女は勉強好きのウィルに目をかけて相手になったので10歳の頃には平易な書物が読めるほどになっていた。

当時アメリカではダイム・ノーベル（dime novel）と呼ばれる10セント小説の人気が高かったが、ウィルは叔母の教室で机を並べている親友のトム・テイトと語らい「森の悪魔」（"The Wood Demon"）、「三本指のジャック」（"Three-fingered Jack"）や「粉屋とその弟子」（"The Miller and His Men"）などを読み耽ったと言われている。しかし、間もなく彼の読書の対象は、本格的な文学書へと移っていった。これは言うまでもなく、ひとえに叔母リーナの指導のたまものであった。

彼女はヨーロッパの古典文学に精通していたので、私塾の教材として英文学その他の名作を多く使用した。その上、彼女はウィルが文学を正しく理解する能力を持っていることに早くから気付いて、それを伸ばそうと気を配っていたのである。幽霊や冒険物語の多いダイム・ノーベルに対するウィルの関心は、一時的なものに過ぎなかった。間もなく彼は、アレクサンダー・デュマやヴィクトル・ユーゴーの作品を手始めに、ヨーロッパの文学書を次々に読んでいった。スコット、サッカレー、リットンそしてコリンズなどの小説がこれに続いた。

この時代の読書遍歴で、ウィルが最も感動したものが二つあったように思われる。その一つは、アラブ民族によって大成された民族的伝承文学の傑作『千夜一夜物語』であった。彼は「何か芳香の高いアラビア的なもの」（"something high-flavored and Arabian"）に心を動かされたと後に語っている。これより約30年後の1904年に、O・ヘンリーは「マディソン・スクエア・アラビアン・ナイト」（"A Madison Square Arabian Night"）によって、少年時代に生じた「アラビアン・ナイト」へのこだわりを書き残している。ここで、カリフに物語を続けて命を長らえる妃シェーラザード役を演じるのは落魄した画家シェラード・プルーマーで、彼の巧みな語りと彼の描く不思議な肖像画によって、バグダッドの国王ならぬニューヨークの富豪カールソン・チャマーズは妻への疑惑から救われるのである。

さらに、少年ウィルが「アラビアン・ナイト」に劣らず没頭して読んだのは、チャールズ・ディケンズの作品であった。彼は全著作を繰り返して読んだと言われるが、中でもディケンズの未完の作品『エドウィン・ドルードの秘密』（*The Mystery of Edwin Drood*）については、本人みずから結末を書いてみるほどの打ち込み方だったと伝えられている。もっともこの時期の彼は、書いたもの

をすぐ廃棄したので、それらの原稿はほとんど残っていない。彼はこの他にもチャールズ・リードの作風に強く魅せられ、代表作の「僧院と炉辺」("The Cloister and the Hearth") などが短編を主とするO・ヘンリーの創作手法に少なからぬ影響を与えたと考えられている。

このようにミス・リーナは、ウィルを含めて総べての生徒たちに書物に親しみ文学を愛することを教えたが、読み書きと算数の他に絵を描く手ほどきも行なった。彼女自身エッジワース校で美術を学んだ経験があったので、絵画の楽しさを生徒たちにも知って欲しいという願いからである。もともと絵を描くことは、ウィルの得意とする分野だった。後にO・ヘンリーとして、戯画や諷刺画に発揮した画才は少年ウィルの時期に早くも芽生えていたのである。友人スミスが当時を思い出して伝記に記したところによると、黒板に出て算数の問題を解くウィルは「右手で計算を書きながら、同時に左手ではミス・リーナの似顔絵を細部までそっくりに描き、しかもそれを彼女が黒板に背を向けて小さい教室の端から端まで歩く僅かの間にやってのけた」というほどの器用さだった。

やがて12歳になる頃、ウィルは絵については教師を越えたと言われた。祖母方の親族トム・ワースが、ハーパーズ・ウィークリー紙（*Harper's Weekly*）に諷刺漫画を描いていたので、周囲の者はウィルが同じ道を進むものと考えていた。彼の戯画は単純な線を使って簡潔に描くことが特徴で、諷刺画家としても十分に通用する才能を持っていたと思われる。事実、終生彼は著述と共に諷刺画を描き続けたし、テキサス時代には新聞に掲載する戯画のみに頼って生活を立てた月日もあったほどである。結局、ウィルが文筆への道を選んだのは、彼が生涯を通じて得た唯一の教育を受け持った祖母リーナが、いかに強い影響力をもって少年の心に真の文学への理解と愛を植え付けたかという証左に他ならない。読書に関するO・ヘンリーの次の述懐は、リーナの指導による選書方針の適切さの一端を窺わせるものである。

> 私は13歳から19歳の間に、それ以後の総べての歳月に読んだより多くの書物を読んだ。また、いつも古典だけを読んでいたから、その頃の私の好みは現在よりずっと良かった。最も気に入りの本はバートンの『憂愁の解剖』（*The Anatomy of Melancholy*）と、レーン訳の『アラビアン・ナイト』だった。（中略）今、私には全く本を読む時間がない。私は20歳前に総べての読書をしてしまったような気がする。（Charles Alphonso Smith, *O.Henry: Biography*; 76より）

15歳で、叔母の私塾におけるウィルの勉学は終わった。「大学で勉強するためだったら、私はどんなことでもしたであろう」と、後年O・ヘンリーは語っている。それほど彼は学業の継続を望んでいたし、祖母とミス・リーナも彼を進学させたいと願っていた。しかし、前述したように1870年代の後半になると、父アルジャーノンの医療による収入は全く望めず、一家の財政は極度に逼迫していたのでウィルが働いて家計を助けることが必要だったのである。

この間に一度、ウィルの諷刺画の才能を見込んだポーター家の姻戚ロバート・ビンガム大佐がノース・カロライナ州ミベーンで勉学するための学費や食費の支給を提案したが、教科書と制服の費用や旅費さえ捻出できない状況だったので断念しなければならなかった。結局、彼の教育は15歳で終わり、叔父クラーク・ポーターの経営するドラッグ・ストアで、見習の薬剤師として働くことになった。4年後の1881年、19歳の彼は薬剤師として正規の資格を取得している。これは一見すると、父親のアルジャーノンが医師になった経過と似ているが、ウィルに医師となる気持のなかったことは言うまでもない。しかし、この間の月日が彼の将来の作家活動にとって、全く無意味であった訳ではない。二つの目的にニトログリセリンを使い分ける「あやつり人形」("The Marionettes") を

始めとして、薬学や医学の知識が織り込まれているO・ヘンリーの作品は少なくないからである。

ドラッグ・ストアに勤めた5年間は、ウィルにとって満足な歳月ではなかったと思われる。明確な目的もなく、ただポーター家の収入を助けるために働かなければならないのは不本意であっただろうし、文筆や画家への志を伸ばすことができない不満もあったと想像される。彼は友人に対して錠剤を乳鉢で磨り潰したり丸薬を包んだりするには、何の想像力も創意工夫も必要ではなく、叔父のドラッグ・ストアの仕事はつまらなかったと後年に語っている。さらに、店を集会所のようにして古い南部の殻に執着した頑迷な人達が日々集まって、いつも変わらぬ政治談義やうわさ話をしたり、ウイスキーを飲んでいる場面に接するのも煩わしかったらしい。もっとも、飾らない人間性を剥き出しにした男達に応対したこの時の体験が、後にO・ヘンリーの創作に役立ったのは事実で、また憂さ晴らしにめぼしい客の戯画を次々に描いたのは諷刺画の腕を磨く意味での効果があったようである。

一方、黒板に先生の似顔絵をこっそり描いた茶目っ気は衰えず、この時期にも彼らしい奇抜な悪戯が多々記録されている。中でも傑作だったのは、毎日何度も店を訪れるホール医師が検査のために持っていた尿に、かなりの量のシロップをそっと混入した時であった。これは医師自身の尿だったので、検査の結果重症の糖尿病と思い込んだ医師が、遺言書を用意する羽目になったというエピソードがある。真相を知らせる者がいたので騒ぎは納まり、医師と悪戯の張本人とはそれまでより一層親密になったという話が残っている。

十代に入った頃から続いていたウィルの空咳が激しくなったことを、最も気遣ったのは他ならぬホール医師であった。ウィルの母と母方の祖母が、ともに肺結核で死亡していることも医師の憂慮を深める理由となった。ホール医師にはリー、フランク、ディック、ウィルという四人の息子があり、その中のリーとディックの二人はテキサス州ラ・サール郡にあるダル兄弟の牧場で働いていた。医療の合間に、ホール医師夫妻はテキサスの息子たちを訪問することになったが、咳に苦しむウィルには転地が得策だと考えて同行するように勧めた。テキサスの乾燥した空気が病気の治癒に有効に作用した例が多かったからである。

祖母ルース・ワースと叔母リーナは、医師の提案に同意した。万全な健康体でないせいもあったと思われるが、時折奇想天外な悪戯で周囲を驚かすことはあっても、元来ウィルはどちらかと言えば引っ込み思案で消極的な性格であった。しかし、単調なドラッグ・ストアの生活から逃れたいと思っていた彼にとって、テキサス行きは願ってもない機会であった。医師と祖母たちの話を聞いた彼は、進んで平穏無事な故郷での生活に別れを告げる決意をした。

かくして、これまで出生地グリーンズバロから、12マイル以上の遠方に行ったことがなかったウィル・ポーターは、ホール医師夫妻の勧めに従って西部テキサスの新天地に向けて出発した。持ち物は僅かな着替えを入れたスーツケース一個、ポケットには数ドルの小遣いが入っていた程度であった。1882年3月、ウィルが20歳を迎える年の春であった。

2．O・ヘンリーの南部時代作品

O・ヘンリーは初期の習作と言うべき作品を後に敷衍、改作したり、古い体験を新作に利用することも多かった。確かにニューヨークに移住の後、特に「ニューヨーク・ワールド」日曜版のために執筆したものは、この都市の生活を題材にしたものばかりで年代も特定される。しかし、その他の一般の作品を発表の年次を追って考察することには、上記の理由からあまり意義があると思われないのである。

一方O・ヘンリーの作品は、それぞれの背景となる地域によって、かなり鮮明な特色を示している。少年時代を過ごした南部に関するものが、いわゆるオールド・サウスのトール・テイル（大げさなホラや自慢話）や南北戦争後の南部の苦悩をうかがわせる作品であるのは、その一例である。

O・ヘンリーは、スケッチ風の小品を「ヒューストン・ポスト」紙に寄せた1896年から1910年に歿するまでの間に、オールド・サウスを舞台とし、南北戦争前の南部人気質や彼らの活動を取り上げた作品を約30編ほど発表している。数量的に見れば、これは彼の全作品の僅か一割に過ぎないが、その多彩な内容と語り口から彼の文学がいかに深く南部の文化的背景と係わりを持つかは十分に理解できる。

これら南部ものと呼ばれる作品は、次に列挙する四つの範疇のいずれかに属するものと考えられる。

a. トール・テイル
b. 南部地方色豊かなロマンス
c. いくらか南部地方色を持つロマンチックな冒険談
d. 南部地方色の濃いトール・テイル

14の短編を集めて1908年に出版された『優しいペテン師』は、既に新聞や雑誌に発表した作品による他の短編集と異なり、書き下ろしの作品を集めた点で特異な存在である。ここには、O・ヘンリーの作品でトール・テイルと称される 8 編のうち 6 編が収められている。優しいペテン師ジェフ・ピーターズ（Jeff Peters）が登場する 5 編中で秀作と言われる「にせ医師物語」（"Jeff Peters as a Personal Magnet"）の冒頭でもトール・テイルぶりは十分に窺うことができる。

> 俺がアーカンソー州のフィッシャー・ヒルに来た時には、鹿革の服に鹿革の靴を穿き、髪は長く伸ばして30カラットのダイヤモンド入りの指輪をしていたものさ。（中略）俺は有名なインディアンの呪術師ドクター・ウォーフーを名乗っていた。

という調子である。結局、にせ医師ジェフ・ピーターズは市長を騙して250ドルをせしめたと思ったとたんに付き添いの青年に化けていた刑事に逮捕される。ところが証拠の250ドルを持ちジェフを引き立ててその場を去る刑事が、実はジェフと手を組んだ相棒だったという、O・ヘンリー一流のどんでん返しが最後に控えていたのである。この他にも『優しいペテン師』には、「狼の毛を刈れ」（"Shearing the Wolf"）、「詐欺師の良心」（"Conscience in Art"）や「孤島の独占企業主」（"The Octopus Marooned"）など、トール・テイルと呼ぶにふさわしいジェフ・ピーターズの物語が並んでいる。

さて、典型的な南北戦争前の南部気質を描いた作品としてはO・ヘンリーの死後1911年に出版された短編集『てんやわんや』（*Sixes and Sevens*）所載の一編「ハーグレイブズの一人二役」（"The Duplicity of Hargraves"）を挙げたい。

南部アラバマ州モビール（Mobile）出身のペンドルトン・トールボット少佐と娘のリディアは、少佐が執筆中の書物の成功に一家の経済的立て直しを賭けてワシントンに出て来ている。書物のタイトルは、何とも古めかしい「アラバマ州の軍人、裁判官及び弁護士の逸話と回想」（"Anecdotes and Reminiscences of the Alabama Army, Bench, and Bar"）というもの。最後の部分を書き上げるために、二人は素人下宿に部屋を借り、娘のやりくりで日々を送っている。少佐の人物像は次のように記述されている。

トールボット少佐は、古い生粋の南部人であった。彼の目には、現在はほとんど興味がなかったし、何のいいところもなかった。彼の心は、南北戦争前の時代に住んでいた。その頃トールボット家は、何千エーカーもの見事な綿畑とそれを耕す多数の奴隷を所有していた。(中略)彼は、その時代の古い誇りや名誉心と、時代おくれの格式ばった礼儀作法と、それを覆う古い衣装などを、ことごとく所有していた。

同じ家の下宿人はデパートの店員や勤め人が多かったが、中に一人変わり種がいた。大衆的な軽演劇の劇場に出ている俳優ヘンリー・ホプキンズ・ハーグレイブズ青年である。彼は少佐の昔話の最も熱心な聞き手で、やがて二人は昔からの友人のようになった。4ヵ月ほど経って、リディアも手の施しようがないほど家計が逼迫した頃、ふとした気まぐれで少佐は娘を連れてハーグレイブズの出演しているヴォードヴィル劇場に出かける。劇中でハーグレイブズは陸軍大佐ウェブスター・キャルフーンという役を演じたが、彼の服装をはじめ、所作、物言いなどすべてが日常の少佐を模したものであった。それはハーグレイブズが親しく少佐と付き合った間に彼を観察して吸収したものだった。

劇は好評でハーグレイブズには将来への道が開かれるが、からかわれたと感じた少佐は立腹して彼が使って欲しいと差し出す200ドルも受取ろうとしない。やがてハーグレイブズは、他の劇場での出演のため少佐たちの前から姿を消した。

親娘の財政状態がもはや絶望的となったころ、昔トールボット家で働いたという老黒人が少佐を尋ねて来た。「シンディのモーズじいや」と名乗るこの黒人は、南北戦争後に自由の身になって西部のネブラスカに移住するとき、少佐の父から仕事の元手にするようにと、騾馬を一つがい借りていたというのだ。「代金は、払えるようになったときに払ってくれればいい」という「大旦那」との約束に従って、そのとき騾馬を売って得た300ドルを返しに来たという話だった。今度は少佐も意地を張らずに、干天の慈雨のような金を受取った。「モーズじいや」が辞去した後、リディアが嬉し涙を流して喜んだことは言うまでもない。

約一週間後に、リディアはニューヨークで投函された一通の手紙を受け取った。それは次のようなものだった。

親愛なるミス・トールボット

私の幸運を知って、あなたは喜んで下さると思います。私はニューヨークのある劇団から、週200ドルでキャルフーン大佐を演じて欲しいとの申し出を受け、これを引き受けることになりました。

それに、もう一つお知らせしたいことがあります。これはトールボット少佐には、お話にならない方がよろしいかと思います。あの役を研究する上で、少佐から大きな援助を受けたことに対して、またそのことで少佐のご機嫌をひどく損じたことに対して、いくらかでも償いをしたいと思いました。少佐はそれを拒絶されましたが、何とか念願を果たしました。私は300ドルを易々と受取っていただくことができました。

H・ホプキンズ・ハーグレイブズ

追伸 モーズじいやの演技はいかがでしたでしょうか。

ここでもO・ヘンリーは、独特の切れ味を持つ結びを忘れてはいない。
この作品の中で、彼は少佐の著書を通じて北部人の批判を行っているのである。

> 北部の人間は、その感情を自分の商業上の利益に変え得る場合を除いて、人情も人間的な温かさも、全く持ち合わせていない。自分自身あるいは自分の愛するものに、いかなる屈辱が投げかけられても、それが金銭上の損失を招かない限り、なんら腹を立てることもなく、それに耐える。慈善には、物惜しみをしないが、ただしそれはラッパによって前宣伝され、真鍮板に特筆大書されるものでなければならない。

一方彼が、少佐に代表される南部人の生き方を是認していないことは、キャルフーン大佐役を見事にこなしたハーグレイブズの演技に関する次の新聞評に示されている。

> 旧時代の南部の陸軍大佐についての彼の着想と表現とは、そのばかげた大言壮語、奇矯な服装、古めかしい慣用句や言い回し、虫がくったような家系の自慢、真にやさしい心情、潔癖な名誉心、さては愛すべき単純さなどによって、現代の演劇における性格的演技の役柄を、最も巧みに演じて見せたものである。キャルフーン大佐の着用したフロックコートだけでも、まさしく天才の発露にほかならない。ハーグレイブズ氏は完全に観客を魅了し去ったのである。

かつてグリーンズバロの伯父のドラッグ・ストアで働いたとき、店に集まる南部人たちが古い南部の伝統にしがみついて、新しい時代の動きを見ようとしない頑迷さに、嫌気がさしてテキサスへと飛び出したウィルの精神は、変わる事なくO・ヘンリーの胸中に生き続けていたのである。

3．スティーヴン・C・フォスターとアメリカ南部

1916年に、O・ヘンリーの最初の伝記（*O. Henry: Biography*）を発表した前記のチャールズ・アルフォンソ・スミスは、グリーンズバロでO・ヘンリーと共に少年時代を送り、その波乱の生涯を熟知している数少ない友人の一人であった。彼はアーヴィング、ホーソーン、ポー、ブレット・ハートなどをアメリカ文学史上で傑出した短編小説家として挙げ、彼らと比較したO・ヘンリー文学の特色は、短編小説を「ヒューマナイズ」した点にあると述べている。

O・ヘンリーのその「ヒューマナイズ」したユーモアやペーソスに関連して想起されるのは、アメリカ歌曲史に不滅の足跡を残した作曲家スティーヴン・コリンズ・フォスター（Stephen Collins Foster）の名である。

フォスターは1826年７月４日に、ペンシルバニア州ピッツバーグで生まれ、1864年１月13日にニューヨーク所在のベルビュー病院で、37年６ヵ月の生涯を終えている。1862年９月生まれのO・ヘンリーがわずか１歳４ヶ月の時である。1910年に48歳で病没したO・ヘンリーは、フォスターより10年ほど長寿であった事になるが、注目しなければならないのは、二人の生涯と南北戦争の時期との関係である。

南北戦争は1861年に始まり、1865年に終結した。従って、戦争の結末となる奴隷解放を知らなかったフォスターは「故郷の人々（スワニー河）」（"The Old Folks at Home," [The Swanee River]）や「オールド・ブラック・ジョー」（"Old Black Joe"）の名曲で彼らの哀愁を歌った。一方、戦後の混乱した社会をつぶさに体験したO・ヘンリーは、南部人の頑迷固陋に辟易して、多くの戯画や「ハ

ーグレイブズの一人二役」などの秀作を残したのである。

フォスターの生涯も、O・ヘンリーの場合ほどではなくとも、かなり起伏に富むものであった。出生地ピッツバーグは、O・ヘンリーが極端に嫌悪して早々にニューヨークへ向けて立ち去った土地であるが、フォスターの父は大きな雑貨店の支配人で、生活に不自由はなかったと言われる。終焉の地は二人ともニューヨークで、死の直前には日々酒に溺れて健康を害し、寂しく世を去ったことまで共通である。

フォスターは正規の音楽教育を受けなかったが、既に少年の頃から音楽の才能を発揮して、18歳のときに最初の作曲「恋人よ、窓を開け」("Open thy Lattice, Love") を発表した。しかし、作曲を本業とするまでの決意がつかず、兄ダニングがシンシナチで経営していたアーウィン・フォスター商会の帳簿係の仕事を手伝いながら、片手間に五線紙に向かって思い付くままに曲を書く程度だったのである。

この頃の歌曲は「ミンストレル・ショー」で歌うためのものが主流だった。これは白人の芸人が黒人の風をして踊ったり歌ったりする見世物で、歌詞にも黒人なまりを取り入れたものが多かった。フォスターの曲が持つ明るさと単純明解な和音は「ミンストレル・ショー」にうってつけだったので、彼がそれまでに作曲した「ルイジアナ美人」、「ネッド伯父」、「おお、スザンナ」("Oh, Susanna") などは、既に各地で広く歌われていた。特に「おお、スザンナ」は人気が高く、1848年から1849年にかけてのゴールド・ラッシュでカリフォルニアに向かう人達は、皆この歌を口ずさんでいたと言われるほどであった。時には「わたしゃアラバマからルイジアナへ、バンジョー膝に‥‥」の歌詞が「わたしゃ‥‥からカリフォルニアへ、金盥膝(かなだらい)に‥‥」と替えて歌われたとも言われている。

当時、どんな歌でも取り上げればヒットさせると言われたミンストレル・ショーの劇団エド・クリスティー・ミンストレル (The Ed Christy Minstrels) が、フォスターの歌を広めるのに大いに役立ったようである。クリスティーは一曲15ドルの使用料を払い、他に楽譜出版社からの収入もあったから、彼は次第に作曲に専従して生活したいと考えるようになったのである。

1850年、24歳のフォスターはジェーン・マクダウェル (Jane MacDowell) と結婚すると同時に、職業的な作曲家としての道を歩み始めた。後に「金髪のジェニー」として名を残す新妻を得たフォスターは、名作「草競馬」を筆頭に「ドリー・デイ」、「メリンダ・メイ」、「アンジェリーナ・ベーカー」、「ああ、赤い薔薇よ命永らえよ」、「おお、レミュエル、綿畑に行け」など、12曲のミンストレル・ソングを発表して、それら総べてがミンストレル・ショーの重要なレパートリーになったと言われる。

こうして旺盛な創作力を発揮していた彼の作風に、やがて微妙な変化が生じてきた。それまで、主としてミンストレル・ショーのために書いた賑やかで明かるいだけの音楽に満足できなくなったのである。歌詞に黒人なまりが残っている場合も、初期の作品に見られたような、おどけた調子が次第に影をひそめてきていたのである。

この変化は、1851年に発表されてフォスター代表作の一つとなった「故郷の人々」を契機として、彼の多くの作品に顕著に現われるようになり、フォスター歌曲の新しい魅力として愛好者の心をとらえたのである。当時、歌曲は出版された楽譜によって各地に伝えられたので、楽譜の出版部数が人気の目安を示したが、1854年には「故郷の人々」の13万部に続いて「懐かしきケンタッキーの我が家」9万部、「主人は冷たき土に眠る」7万4千部、「老犬トレイ」4万8千部と、極めて高い数が記録されている。

しかし、1850年代の後半に入ると、フォスターの創作力にも衰えが見え始め、「優しいアニー」(1856年)、「君は我が歌の女王」(1859年)の他にはめぼしい作品もない状態となった。気分を新たにして飛躍を図るために、彼は楽譜の出版を行なっているファース・ポンド社の勧めを受けて、1860年に妻子を故郷に残してニューヨークに出た。それより42年後、O・ヘンリーがエインズリー社を頼って、この都市に来た状況に酷似している。

ニューヨークの生活は、フォスターが期待したようなものではなかった。1860年に発表した「オールド・ブラック・ジョー」はヒットしたが、矢継ぎ早に作品を出して名声を上げたO・ヘンリーとは異なり、その後の作品は以前ほど歓迎されなかった。O・ヘンリーとの類似性と言えば、出版社から前借りをしては強いアルコールを飲んで、健康を損ねた点であろう。妻にも去られて孤独なフォスターは、熱病のためにホテルの一室で倒れ、その際に受けた傷がもとで死去している。彼がその生涯に書いた歌曲は約200曲に達し、遺作となったのは全作品中でもとりわけ美しいと言われる「夢見る佳人」("Beautiful Dreamer")であった。

以上、アメリカの代表的歌曲の作曲者スティーヴン・C. フォスターの生涯を、やや詳細に記述した。それはアメリカの自然や風土や社会的な背景なくしては、彼の音楽が誕生し得なかったことを説くためでもある。故郷のピッツバーグを流れるオハイオ州の悠久の姿や南部に広がる広大な綿畑を知らずには、「スワニー河」や「おお、レミュエル、綿畑へ行け」は生まれなかったであろうし、ミンストレル・ショーを離れて、「草競馬」や「おおスザンナ」は語れないであろう。さらに、遠くアフリカの故郷から隔てられて、ただ天国の憩いのみを待つ黒人の悲哀への共感なしには、「オールド・ブラック・ジョー」や「ケンタッキーの我が家」は書けなかったに相違ないのである。

試みに、ヨーロッパに生まれて古くより歌われている歌曲と比較すれば、これは一層明瞭となるだろう。例えば、シューベルトの歌曲「冬の旅」や「水車屋の乙女」を考えてみよう。確かに歌詞の内容には深刻さがあり、メロディーも変化に富み独自の美しさを持つことは否定できない。しかし、それではシューベルトの歌曲に比べて、フォスターの歌が劣ると言えるであろうか。明らかに否と答えなければならない。シューベルトの歌曲がオーストリアの風土に育まれて生まれたと同じく、フォスターの歌曲もまたアメリカ独自の味わいを持つものと評価されなければならないからである。

O・ヘンリーに関しても全く同様で、アメリカ南西部の雄大な自然と特異な社会環境、南北戦争後の人心の変化や社会情勢の変転、またニューヨークという巨大な都市の生活などが、総べての作品の背後にあることは疑いのない事実である。「にせ医師物語」、「詐欺師の良心」などのジェフ・ピーターズものや、その他多くのトール・テイルは、南西部の天地を背景として初めて血が通うと感じられるし、限りなく広がるテキサスの森林や牧場を知る者でなければ、「ラーヴァ峡谷の奇跡」や「ブラックジャックの売り渡し人」を書くことは不可能であろう。さらに、「警察と讃美歌」、「最後の一葉」は言うまでもなく、「二十年後」、「マディソン・スクエア・アラビアン・ナイト」など、O・ヘンリーの文名を高めた数々の作品は、その舞台として資本主義の揺籃期にあるニューヨーク社会を必要としている。イギリスのロンドンであれ、フランスのパリであれ、いや、アメリカの他の都市ボストンやワシントンですら、この場合のニューヨークに替わることはできないであろう。ヨーロッパとアメリカを比較するシューベルト対フォスターの例に倣って、O・ヘンリーについて考えれば、さしずめ彼が生前から比較されたというモーパッサンやチェーホフの名を挙げなければならないであろう。しかし、シューベルトの場合と同様に、この比較もまた当を得たものとは言い難い。モーパッサンの「脂肪の塊」がフランスの娼婦街を背景として書かれ、またチェーホフ

の「桜の園」が没落したロシアの上流社会を題材としたように、O・ヘンリーの諸作品は19世紀末から20世紀初頭のアメリカを舞台として、初めて書かれ得たものと言うべきだからである。

上述の例示で明らかなことは、O・ヘンリーの文学作品とフォスターの歌曲は、いずれもアメリカという特異な土壌からのみ誕生し得た文化的所産であるという点である。もしこれを「アメリカ的」と称するならば、彼らの作品こそ最もアメリカ的と言うべきで、古いヨーロッパ文化の絆を離れた新生国独自の輝きに満ちたものとして、アメリカ国民の誇るべき所産ではないであろうか。

ここでさらに指摘されるのは、両者の作品に共通の底流として、先に述べたアメリカのヒューマニズムが、脈々として息づいていることである。少年の頃、フォスターは黒人霊歌に心動かされたと言われる。「深い河」の彼岸に救いを求める彼らの祈りに、フォスターは優しく共感して「オールド・ブラック・ジョー」を書き、「スワニー河」を歌った。彼は奴隷解放の日を迎えずに他界したけれども、彼が黒人たちに等しい人間として接し、彼らが自由を手にする日を願っていたことは推察に難くない。

先の「O・ヘンリーはアメリカ短編小説を『ヒューマナイズ』した」と評したアルフォンソ・スミスは、例証として挙げるべき多数の作品に困惑したことであろう。「最後の一葉」を筆頭に、「よみがえった改心」、「ベグザー証書二六九二号」等々、適例は枚挙に暇がないからである。子供を誘拐して金を取ろうとした「赤い酋長の身代金」のサムとビルさえも、微笑ましい人間性を備えているのである。社会の弱者に対する優しさが、常に変わらずO・ヘンリーの心を占めていたことは明白である。

4．ジョン・P・スーザについて

明るく屈託のないアメリカ的ヒューマニズムもまた、フォスターとO・ヘンリーに共通する顕著な特色なのである。ここでさらに一つ、アメリカ的なるものの例を加えたい。「星条旗よ永遠なれ」をはじめとして136のマーチを作曲し、「行進曲王」と呼ばれたジョン・フィリップ・スーザ（John Philip Sousa）である。

スーザの一生は、O・ヘンリーやフォスターの場合と異なって、苦難の多いものではなかった。1854年11月6日にワシントンで生まれたスーザは、1932年3月6日にペンシルバニア州リーディングで72年の生涯を閉じている。比較的短命だったO・ヘンリー達に比べると、当時としてはかなりの長寿と言えるであろう。スーザより一世代前に生まれたフォスターは、最後の10年がスーザの幼少期と重なるに過ぎないが、O・ヘンリーの生涯はスーザの存命期の一部に、すっぽり納まるわけである。

父親が海兵隊軍楽隊のトロンボーン奏者だったので、スーザは子供の頃から音楽に親しむ機会に恵まれて育った。20歳頃までは作曲とヴァイオリンを学びながら過ごしたが、1876年にフィラデルフィアに出て、ヴァイオリン奏者、指揮者、音楽教師として働き始めた。1880年に、父がかつてトロンボーンを吹いていた海兵隊軍楽隊の指揮者となり、1892年に退役となるまでの12年間、演奏活動を行った。この間にも、1888年には彼の代表作の一つとなった「忠誠行進曲」や行進曲「十字軍戦士」など、また1889年には新聞社の創立80周年を記念して依頼された行進曲「ワシントン・ポスト」、行進曲「雷神」などを発表して、本格的な作曲活動を始めている。

退役後も、スーザは順調な道を進むことができた。彼の音楽の良き理解者であった富豪デイヴィッド・ブレイクリーの支援を得て、スーザ吹奏楽団が設立されたのである。その後もブレイクリーは、1896年に病歿するまで、楽団のマネジャーとしてスーザを助け活動を盛り立てるために力を尽

くした。そのためスーザは後顧の憂いなく作曲を続けながら、この吹奏楽団を率いて全世界で演奏活動を行うことができたのである。なお、スーザ吹奏楽団には勝れた作曲家兼指揮者を募って選りすぐりのメンバーが集まったので、彼らの中にはその後アメリカ吹奏楽発展の中核となり、目覚しいソリストとしての活動を行った者も少なくない。

今日アメリカでは「第二の国歌」として、全国民から並々ならぬ愛着を持たれているスーザの行進曲「星条旗よ永遠なれ」は、ブレイクリーが死去した1896年に、恩人の重病を知ったスーザがヨーロッパ周遊演奏の旅先から急遽帰国する途中で書いたとも言われている。この曲について注目されるのは、トリオで三回現われる有名な旋律である。スーザ自身の言葉によると、最初の旋律は「北部」を、二回目につくピッコロのオブリガートは「南部」を、また三回目に加わるトロンボーンなどの対旋律は「西部」を、それぞれ表しているという、実に「アメリカならでは」の発想である。スーザが作曲した主要な行進曲としては、この他1890年の「士官候補生」、1896年の「エル・カピタン」、1908年の「美中の美」などが広く知られている。彼の音楽の特色は、ただ調子が良いばかりではなく、その単純な形式の中に美しいメロディーをちりばめて、聞く者の心にしっかりと語りかけて来ることである。そしてその明るさ、優しさ、楽しさは、まさに「アメリカならでは」のものなのである。

ヨーロッパにも、ガンヌの「勝利の父」、「ロレーヌ行進曲」やタイケの「旧友」など、名作といわれる行進曲は少なくない。しかし、これらとスーザの作品とには、大きな相違点がある。ヨーロッパの行進曲は、何千何万もの兵士が隊伍堂々と行進するときの演奏にふさわしい重厚さを持っている。これに対してスーザの曲には、人々の心を喜びに弾ませ、沈む者には安らぎと励ましを感じさせる優しさがある。シューベルトやブラームスの歌曲とフォスターの歌曲の相違は、ここにも明確に存在するのである。

アメリカにも、いわゆるクラシック音楽の分野に属する作曲家がいないわけではない。ガーシュインの「ラプソディー・イン・ブルー」や、バーンスタインの「ウエスト・サイド物語」など、われわれも時には耳にする音楽である。また、これらは十分にアメリカ的な色彩を持つ芸術作品と言えるであろう。中でも、特にニューヨークを舞台としたミュージカル「ウエスト・サイド物語」は、タイトル自体からも、アメリカ色豊かな内容を推測するに十分である。

ここで、一つの疑問が生じる。アメリカ国民はフォスターの歌曲を、またスーザのマーチを、世界一流のものとして誇りに感じているであろうか。それが大劇場で上演される歌劇でなく、家庭でも公園でも折にふれて歌われる小品の歌曲であり、また、大編成のオーケストラによって演奏される交響曲でなく、町のブラスバンドのレパートリーにも加えられる行進曲であるが故に、深みに欠けるマイナーな芸術作品と卑下しているであろうか。答えは「否」であろう。いや、それどころかこれらの作品が極めてアメリカ的であるが故に、誇りを感じ愛着を抱く度合は一層強いとも思われるのである。

それならば、何故彼らはO・ヘンリーの文学についても、同様の対応をなし得なかったのであろうか。仮に一時期に限られたとしても、彼の作品がアメリカ文学史から姿を消した期間さえあったのは事実である。虚構が多く哲学的思考が浅くかつ短編であることは、批判や軽視を正当化する理由とはならないのである。

日本の文学史について言えば、短編小説の名手としては芥川龍之介、太宰治などの名が容易に挙げられるであろう。人生観の深浅は別として、彼らの作品に虚構はないであろうか。否、「すぐれた虚構こそすぐれたフィクションの生命がある」という逆説さえある。虚構をそれと感じさせずに、

読者を引き込むことは、卓越したフィクション作家のみなし得るのである。その意味では、芥川も太宰もO・ヘンリーもまた然りである。

「藪の中」で芥川龍之介が、巫女に呼び出された死者に結末を語らせようと、あるいは「グッドバイ」で太宰治が、美女の担ぎ屋に現実では不可能と思われる一人二役を演じさせようと、作品の価値にはいささかの変動もない。それと同様に、「ハーグレイヴズの一人二役」で、彼の二役の演技が見破られないはずはないとしても、その評価が減じられる理由とはならない。作品の長短に至っては、論議の外の問題であろう。ショート・ショートでさえ、文学の一形式として立派に通用するのであるからである。

第 2 部においては、本論の結びとしてO・ヘンリー文学がアメリカ独特な自然環境と社会的背景を有して初めて誕生し得たものであること、すなわち「この国ならでは」生まれなかった最も「アメリカ的なるもの」であることを述べた。また、彼の文学を浅薄と批判したかつての風潮に、然るべき根拠がないことを併せて論述した。そのため、これまで既にすぐれて「アメリカ的なるもの」と同国民が挙って誇りとしているフォスターの歌曲と、スーザの行進曲を引例した。

O・ヘンリー、フォスターそしてスーザ—このアメリカ的なるものは、今後も万国の人々に長く歌われ、演奏され、そして愛読され続けてゆくことであろう。

参考文献

Clarkson, Paul S. *A Bibliography of William Sydney Porter (O. Henry)*. Caldwell, Idaho: Caxton Printers, 1938.

Current-Garcia, Eugene. *O. Henry*. New York: Twayne Publishers, 1965.

Davis, Robert H., and Arthur B. Maurice. *The Caliph of Baghdad*. New York: D. Appleton and Co., 1931.

Dictionary of American Biography. New York: Charles Scribner and Sons, 1909.

Henderson, Archibald. *O. Henry, A Memorial Essay*, Raleigh, N.C.: Duke University, 1914.

Henry, O. *The Complete Works*. New York: Doubleday and Co., 1928.

Jennings, Al. *Beating Back*. New York: A. L. Butt Co., 1920.

_____.*Through the Shadows with O. Henry*. New York: A. L. Butt Co., 1921.

Kramer, Dale. *The Heart of O. Henry*. New York: Rinehart and Co., 1954.

Langford, Gerald. *Alias O. Henry*. New York: The Macmillan Co., 1957.

Long, E. Hudson. *O. Henry ; The Man and His Work*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1949.

Moyle, Seth. *My Friend O. Henry*. New York: H. K. Fly Co., 1914.

O'Connor, Richard. *O. Henry, The Legendary Life of William S. Porter*. Garden City, New York: Doubleday & Co., 1970.

Pike, Cathleen. *O. Henry in North Carolina*. Chapel Hill, N.C.: University of North Carolina Library, 1957.

Smith, C. Alphonso. *O. Henry: Biography*. New York: Doubleday, Page and Co., 1916.

Steck-Vaughn Co., eds. *O. Henry, American Regionalist*. Austin: Steck-Vaughn Co., 1969.

Stuart, David. *O. Henry: A Biography of William Sydney Porter*. MI: Scarborough, 1990.

Williams, William Wash. *The Quiet Lodger of Irving Place*. New York: E. P. Dutton and Co., 1936.

Wilson, Lollie Cave. *O. Henry's Trying Years*. Los Angeles: Wetzel Pub. Co., 1935.

結び

アメリカ南部の精神や文化について、ウィリアム・フォークナー、O・ヘンリー、スティーヴン・C・フォスター、そしてジョン・P・スーザの4名を通して考察して来た。フォークナーの場合は、深南部における人種問題を中心に考え、O・ヘンリーとS・C・フォスター、そしてジョン・P・スーザにおいては、各自それぞれの南部との拘わりや作品（O・ヘンリーの文学作品、フォスターとジョン・P・スーザの歌謡作品等）の南部色や南部性などについて考察を進めた。フォークナーの南部主義や南部愛は、人間愛を含みながらも根強いものであった。彼の『墓場への侵入者』は、彼の文学経歴上の後期の傑作であり、彼はこの作品に複雑な人種問題を見据えて、南部人による社会改良の願望を込めているように思われる。また、O・ヘンリーは、北部の金銭主義、実利主義を批判し、南部を肯定的に眺めながらも、同時になお南部の古い頑迷な体質を拒むところがあり、S・C・フォスターの歌謡は「ミンストレル・ショー」とも結びついて、数々の懐かしい、dearな名曲を後世に残すことに成功したが、彼の名曲の魂は、「オールド・ブラック・ジョー」や「ケンタッキーの我が家」に見るように、黒人奴隷の悲哀への共感に深く根差したものであった。

アメリカ南部の文学や芸術は、20世紀前期の南部農本主義思想のうねりの中で大いに高まり、かつ輝いた。そしてそれは19世紀以来の南部的な伝統に依拠するものでもあった。奴隷制度（Slavery）の弊害や南北戦争（the Civil War）の悲惨、同戦争後の再建時代（the Reconstruction）の苦悩等を孕む独自の歴史軌跡を描きながらなお南部的郷愁や心の繊細さを伴う南部独特の精神文化の豊かさの源泉を、更に深く探求してみたいものである。そこに普遍の価値観が存することは、フォークナーやO・ヘンリー、フォスター、そしてスーザらの不滅の業績がよく証明しているのである。

（依藤道夫・齊藤　昇）